

特集 『渚にて』再訪——核、ハリウッド、オーストラリア』によせて

西 崎 文 子

ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下から70年という節目の年に、アメリカ太平洋地域研究センターは、ハリウッド映画『渚にて』を題材としたオーストラリアのドキュメンタリー映画『FALLOUT』の公開上映・討論会を企画した。本特集は、2015年10月17日に開催されたこの上映・討論会のパネリストにあらためて寄稿を依頼したものである。

『渚にて』は、ソ連がスプートニク打ち上げに成功し、アメリカで「ミサイル・ギャップ」が騒がれてから2年後の1959年に公開された。エヴァ・ガードナーとグレゴリー・ペック、フレッド・アステアなど当時の大スターたちが登場するこの映画は、政治家や文化人を迎え、世界各地で華やかに封切られた。しかし、ネヴィル・シュートの原作にもとづくこの映画の筋書きは、決して明るいものではなかった。第三次世界大戦が勃発して4,700個以上の核爆弾が爆発、死の灰は北半球を覆い尽くして南下し、ついにオーストラリアのメルボルンに迫ってきたというのがその設定だったからである。そのような中、避難してきた米国原子力潜水艦の艦長（グレゴリー・ペック）と地元オーストラリア人女性（エヴァ・ガードナー）とが人類の破滅を前に恋に落ちる。彼らも、そして彼らを取り巻く人々も、放射能から逃れることはできない。冷戦たけなわの時期、核による人類滅亡を描く映画の製作は、社会派監督・製作者として名を挙げていたスタンリー・クレマー監督にとっても大きな挑戦だったことは間違いない。実際、この映画は国際的な反響を呼んだものの興行的には失敗に終わった。

それから50年余、オーストラリア出身のプロデューサー、ピーター・カウフマンと、ローレンス・ジョンストン監督の手によって、映画『渚にて』の製作をめぐる議論や騒動を題材にしたドキュメンタリー映画『FALLOUT』が発表された。このドキュメンタリーは、『渚にて』の製作に関係した人々や、ジャーナリスト、歴史家にインタビューし、それぞれの視点から原作者シュートとクレマー監督の確執や、映画の中での放射能の取り上げ方、核をめぐる国際情勢について語ってもらうという構成をとっている。シュートの娘であるヘザー・メイフィールド、クレマーの妻カレン・クレマー、出演女優の一人ドナ・アンダーソン、歴史家ポール・ハム、ジャーナリストのギデオン・ヘイグなどが登場するが、特徴的なのは、製作者たちがナレーションを一切入れず、これらの発言のみを使って叙述を組み立てようとしている点である。シュートとクレマーとの葛藤の背景には何が存在していたのか、核爆弾の破壊力が加速度的に増大していく1960年前後の時代に、核の恐怖はどのように捉えられていたのか、この映画の今日的意義はどこにあるのか。しかし、議論はオープンエンドのまま終わり、さまざまな思索の糸が残される。

その思索の糸をすくい上げたのが、上映会のために来日した製作者のピーター・カウフマン氏と、法政大学の川口悠子氏、中央大学の中尾秀博氏の三名であった。カウフマン氏は、『FALLOUT』製作の背景や、オーストラリアと核開発との関係について説明し、川口氏は、『渚にて』に描かれた核・放射能による「死」や「破滅」を通じて、1950年代の米国

における核認識がいかなるものであったかを議論した。また、中尾氏は、核や放射能、あるいは人類の危機が文学や映画にどう表現されてきたのかを分析し、核を題材とした作品を多面的に理解することの意義を強調した。

『FALLOUT』や、ここにおさめられた論文が提起するのは、「核」の問題の今日性である。「ヒロシマ・ナガサキ」とともに「フクシマ」という言葉もがその衝撃力を失いつつある中で、2015年が、核不拡散・核軍縮にむけての国際的な動きが不調に終わった年であったことを考えると、この問題を多面的に考え続けていくことの重要性を強調しすぎることはないであろう。

末筆ではあるが、カウフマン氏の来日を可能にくださった豪日交流基金とリーディングプログラム「多文化共生・統合人間学プログラム」(IHS) に深く感謝したい。

